

錢形平次捕物控

風の詭計

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、旅をしませんか、良い陽氣ですぜ」

ガラツ八の八五郎はまた斯^こんな途方もないことを持込んで來たのです。梅の花はもう梢^{こずえ}に黄色くなつてゐるのに、今年の二月は妙に薄寒くて、その日も行^{あんくわ}火の欲しいやうな曇つた日でした。

「旅？ 又なんか嗅ぎ出したんだらう。物見遊山には早いし、後^ご生氣^{しやうぎ}や金儲けで草鞋^{わらぢ}をはく柄^{がら}ぢやなし」

錢形平次は煙管を投り出して、天文を案ずる型になるのです。お察しの通りだ。實はね、親分、川崎^{こまき}の小牧半兵衛が殺された

んで——」

「なんだと？ そいつは川崎切つての大金持ぢやないか」

「公方様お聲掛りの家柄だ。この下手人^{げしゅにん}を擧げなきや、土地の

御用聞の顔が立たねえ。錢形の親分の引込思案は豫^{かね}て承知の上だ

が、其處をなんとか乗出して貰へまいか——と川崎の孫三郎親分

から態々^{わざわざ}の手紙ですぜ」

「そこで旅をしろ——といふのか。川崎や品川ぢや旅といふほどの遠道ぢやあるめえ。ところでお前は孫三郎親分を知つて居るのか」

「知つてゐるの段ぢやありません。去年友達と江の島へ行つた歸り、川崎の萬年屋から使ひをやつて、旅籠代と小遣を借りました

よ。十手の誼^{よじ}みでね」

「飛んでもねえ誼^{よじ}みだ、それは返したんだらうな」

「綺麗に忘れてゐましたよ。——今朝孫三郎親分から手紙を貰つて、そのとたんに一年前の借りを思ひ出したんで、ヘッ」

「呆^{あき}れた野郎だ、いくら借りたんだ」

「二朱か一分ありやよかつたんで、さう言つてやると、孫三郎親分は自分でやつて來て旅籠屋の諸拂を濟ました上、その晩うんと飲んで江戸へ歸る路用が三兩——」

「川崎から江戸へ行列を組んで八枚で飛ばしたつて、三兩要るわけはねえ。それを黙つて借りて來たのか」

「ヘエ、ツイね、借金に剩^{つり}錢^{せん}は出せねえからそのまゝ」

「馬鹿野郎」

平次もポンポン言ひましたが、ガラツ八の徹底てつていした呑氣どくさは腹を立てる張合ありません。併しかしこんな事がきつかけで、江戸の御用聞の平次が、八州役人の支配してゐる、川崎まで乗出すことになつたのでした。

錢形平次と八五郎が、兎も角、土地の御用聞川崎の孫三郎の家に草鞋わらぢを脱いだのは、その日ももう申刻なつ近い刻限でしたが、中年者の孫三郎は、下へも置かぬ喜びやうです。

「錢形の親分が來てくれゝば千人力だ。弱音を吐くやうだが、小こ牧まきの旦那だんなが死んぢや、いづれ公儀の御耳に入るだらうし、三日経たないうちに下手人げしゆにんを擧げるやうにと、宿役人からも折入つて

の頼みだ。——どうも俺一人ぢや心配でならねえ。忙^{いそが}しいのを百も承知で、實は八五郎兄^{あにい}哥^いにお願ひしたやうなわけさ」

そんな事を言ふ四十男です。

やがて平次と八五郎は、孫三郎に案内されて、小牧半兵衛の大きな屋敷。——本陣と向ひ合つて、川崎宿の名物の一つになつてゐる門を潜^{くぐ}りました。中は小大名の下屋敷ほどの構へで、その一番小さいのが金藏で、主人の半兵衛は昨日の朝、その中で殺されてゐたのです。

「これだよ」

三間に四間ほどの一番小さくて一番嚴重な土藏は、母屋おもやから廊下傳つとひに續いて、其處には夥おびたしい金銀と、數代に互わたつて貯たくはへた骨董類つとうが入れてあるのですが、三重の扉を開くとムツと腥氣せいきが漂つて、一步踏み込んだ孫三郎も、思はず足を淀ませました。

「——死骸は檢屍が濟んで、昨日の中に母屋おもやへ移したが、小牧の旦那が此の中でやられたんだ。手燭てしよくを斬り落されてゐるところを見ると、後ろから飛かゝつたやつでもない——」

孫三郎は陰慘いんさんな土藏のなかで續けるのでした。

「聲はしなかつたのかな」と平次。

「誰も氣が付かなかつたさうだ。一昨日をとゝひの晩夜中近い頃、母屋の此方こつち寄りの部屋——土藏に一番近いところに寢て居る主人が、變な物音がするやうだと言つて、寢卷の上に絆はんでん纏を引つけて、手燭を持つて自分で見廻りに來たんださうだ。年のせゐか寢つきの悪い上に、恐ろしく目ざとい人で、こんなことがちよいとあると、お内儀が言つて居るが」

「刃物は持たなかつたのかな」

「なんにも持たなかつたらしい。それから半刻はんときた経つても床へ歸らないから、お内儀が隣の部屋に寢てゐる娘——と言つてもこれは先妻の子だが、——お優いさんといふのを起して、二人で提灯を點けて、恐るゝ來て見ると——」

「その時土藏の戸は開いてゐたんだらうな」

「半分開いてゐたさうだ。恐る／＼提灯を差し込んで見ると、中は血の海だ。二人は腰を抜かすほどの騒ぎさ」

「傷は？」

「佛様はまだ母屋にあるから、あとで見てください。前から三太刀^{たち}も斬り付けて、喉笛を刺したのが止め^{とど}になつて居る。いやもうひどいやり方で」

「盗られたものは？」

「なんにもないさうだ。——番頭さん、それに相違あるまいね」

「へエ——、それはもう、店からも土藏の中からも、一文も無くなつては居りません」

五十年^{ねんばい}輩の老實らしい支配人の忠助は、何時の間にやら後ろへ來て居るのでした。

「道具類とか、書き物には？」

平次は初めてこの支配人に口をきゝます。

「旦那はそんなものはお嫌ひで、あまりお道具類をお集めになりません。それでも御先祖から持ち傳へたのが、随分澤山御座います。すが先づなんにも無くなつたものは御座いけませんやうで」

土藏の中は整^{せいぜん}然として、物の亂れた様子は少しもなかつたのです。

外へ出て仰ぐと、母屋と五戸^{いつとまへ}前の土藏は切^{きり}棲^{づま}形^{がた}の屋根を並べて、二月の空つ風がその間を刃^{やいば}のやうに吹き抜けますが、何處

から飛んで來たか、散々に破れた大きな風たこが一つ、金藏の嚴重に閉つた二階窓の扉の鑲くわんに引つ掛つてバタバタして居るではありませんか。

「八、あとであの風を取つてくれ。絲が鑲にどんな工合に引つ掛つて居るか、それを見たい——」

平次はそつと八五郎の耳に囁きます。

それから平次は家の周圍を念入りに調べました。土藏と土藏の間、家の後ろなどには、滅茶滅茶に足跡が亂れて居りますが、霜しも解もと頃けではあり、多勢の雇人に踏み荒されて、何が何やらわかりません。

「鍵は誰が持つて居るんだ」

平次は元の金藏の前へ來ると、老番頭に訊きました。

「金藏の鍵は主人の居間に置いて、主人か私でなければ手をつけないことになつて居ります」

「金藏の扉は毎日開けるんだね」

「格子戸と櫳かしの板戸と漆喰しつくひの大扉と三重になつて、中の二枚の

戸はそれ／＼の棧さんがひとりでおりますが、一番外の大扉のは海ゑ

びぢやう

老錠で、その鍵は別にあります。これだけの締りですから、金

藏に用事のある時開けるだけで、三日も四日も締め切りのことも

御座います。——尤ももつとをとゝひ一昨日は遠方から入る金があつて、宵によひ一

寸開けしましたが——え、え、それはもう前からわかつてゐたこと

で御座いますとも」

「すると、假りに——假りにだよ、土藏の中に曲者が紛れ込んでゐたとしても、誰も開けてくれる者がなければ、三日も四日も外へ出られないわけだな」

平次は妙なことを突つ込みます。

「へエ——、まあ、さう言つたわけで、外の大扉には海老錠がおりて居りますから、中の二つの戸の棧は内からでも開けられませんが——」

老番頭の忠助は苦笑するのです。

「だが、金藏の戸を開けつ放しにして置くこともあるだらう、半刻や一刻は——」

「それは御座います。屋敷内のことですから物を運ぶ時などは、

ツイ扉を開けたまゝ、母屋へ行つて來ることも御座います」

「その間に、曲者は忍び込めないとかぎは限るまい」

「忍び込んでも、中から出られません」

「人に開けさせさへすれば出られる筈だ。開ける人がなければ、二階の窓を開けて飛降りるといふ術てもある」

「三間近い高さで御座いますよ。それに、下は忍び返しを打つた堀で」

忠助は酔っぱい顔をするのです。二階の窓は内から開けられるには相違ありませんが、飛降りるのは容易ならぬ藝當です。併しかしそれも程度の問題で、丈夫な縄でもあれば、身輕なものとは十分二階の窓から飛降りられないことはないでせう。——平次はそんな

事を考へて居る様子でした。

三

「刃物は？」

と平次。

「脇差が捨ててあつたよ。番所へ持つて行つたが」

「持主は？」

「それが、甥^{をひ}の傳七郎といふ男の品だ。尤^{もつと}も本人は何時の間になくなつたと言つて居るが」

川崎の孫三郎は、辯解する調子で言ふのです。

「どんな男だ」

「良い男だが、評判はよくない。氣の荒いところがあつてね。それに今度は散々だよ。伯父を殺した脇差ばかりぢやない。縁の下には^{あはせ}裕が血だらけになつて突つ込んであつたし、自分の床にも血が附いて居た。それに――」

「まだあるのか」

^{をと、ひ}

「一昨日の晩、自分の部屋から、雨戸をそつと開けて外へ出てゐる。奉公人達は皆んな知つて居るが、傳七郎は^{よつ}亥刻から先時々自分の部屋をあげることがあるさうだ。本人は町内の師匠のところへ行つたと言つて居るが、町内の女師匠の鶴吉といふ大年増が、長い間傳七郎と深い仲だから、口を合せて居る分にはどんな細工^{さいく}

でも出来る」

「フーム」

「もう一ついけないことには、傳七郎はお嬢さんのお優^いさんと娶^めあは合^あせられて、小牧^{こまき}の後を繼ぐことになつてゐたんだが、師匠の鶴吉との仲が知れて、伯父の大旦那にうんと小言を言はれた上、お優さんと娶合せることも、此の家の跡取にする事も破談にされて了つた」

「成程ね。——そんなに證據が揃つてゐるのに、なんだつて傳七郎を擧げなかつたんだ」

「錢形の親分の前だが、證據がそろひ過ぎるよ。傳七郎はどんなに馬鹿だつて、自分の脇差で伯父を殺し、自分の袷を血だらけに

して縁の下にネヂ込み、その晩町内の師匠のところへ轉げ込むやうなことはしないだらう」

さすがに川崎の孫三郎の推理には、老^{らう}巧^{かう}なところがあります。

「だが、土藏へおびき出して、主人の正面から切つてかゝるのは、餘つ程知つてゐる者でなきや出来ないことだぜ。そんな人間といふと平常^{ふだん}この家に居る者で、土藏へ入つても疑はれない者、——性根^{しつか}の確りした、腕つ節の強い奴」

平次にさう數へ上げられると、疑ひは又傳七郎の方へ戻つて來るのです。

「そんな人間は傳七郎のほかにはない。奉公人は多勢居るが、支配人の忠助と、甥^{をひ}の傳七郎と、通ひで帳面をして居る又六の外に

は、子供や女ばかりだ」

孫三郎はこんな事を細々こま／＼と説明し乍ら、平次を母屋みちびに導くのです。

主人——小牧半兵衛の死骸は、見るも無残でした。五十八といふにしては、恰幅も見事、若い時は撃げき劍けんの一と手位はやつたらしく、容易に人に斬られる筈もないのですが、土藏の中で全く不意に襲はれたのでせう。

平次は線香をあげて佛の前から退くと、

「御主人は土藏へ入つた時、後戸を閉める癖があつたと思ふが——」

忠助へ訊ねました。

「へエー、その通りで御座います。夜分などは泥棒に跟け入れらるからと仰有つて中へ入ると必ず後戸を締めました」

「だから、それだけの騒ぎも外へは聞えなかつたんだらう。心得たやり方だな」

平次は曲者の悪智恵に、舌を捲くばかりです。土藏の中におびき入れた細工や、主人の習慣をよく知り抜いたやり口は、如何にも憎いほどの行届きやうです。

「親分さん、御苦勞様で御座います」

次の間から入つて來たのは、死んだ主人の後添のちぞへお千世でした。三十五六の素晴らしい大年増で、身扮みなりの派手なこと、顔の表情の大お袈裟ほげさなこと、化粧の濃いことなど、年齢にも身分にも、場所柄に

も不似合の感じ です。後ろから覗くやうに小腰を屈めたのは、その繼娘で小牧家の一粒種、曾ては甥の傳七郎と娶合せようとしたお優でせう。これは十八九の目鼻立の美しい、表情の内輪な、いづれかと言へば淋し氣な娘で、繼母のお千世とは全く違つた世界に住む人間の感じ です。

「一昨日の晩のことを詳しく聽かして貰ひませうか、お内儀さん」
「私はまあ、何うしませう。こんな事になつて、主人だつてあんな虐たらしい死にやうをしては浮ばれません。どうぞ、お願いだから下手人を擧げて、敵を討つて下さい」

お千世は平次の問ひとは凡そ縁の遠いことを恐ろしい勢ひでまくし立てるのです。

「え、目ざとい人で、夜でも夜中でも、氣になることがあると、自分一人で見廻りました。あの晩も夜中頃になつて、金藏の方でそりや變な音がしたんですもの。プーンと言つた鋸のこぎり引でもするやうな、虻あぶが障子の間へ入つたやうな、——私も聴きましたとも。すると主人は飛起きて、絆はんてん纏を引つ掛けて、手燭てしよくと鍵を持つて、廊下傳ひに土藏の方へ行きました。それつ切り半刻経つても歸らないぢやありませんか。あんまり心配だから、隣の部屋に寢てゐる娘を起して、二人で、行つて見ると——」

土藏の戸は半分開いてゐたこと、中を一目見て悲鳴をあげたこと——お千世は身振り澤山に話すのです。

「ところで、御主人が平常ふだん一番信用して居たのは誰でせう」

「番頭の忠助どんですよ」

當り前のことと言はぬばかりです。

「それから？」

「通ひ番頭の又六どん」

「傳七郎さんとか言ふ甥御は？」

「さうですね」

お千世の饒舌ぜうぜつも其の問ひには容易に應へられさうもありませ

ん。それからお優いうの聶いや、この家の跡取のことも訊きましたが、

お千世はこの問題にもあまり觸れ度くない様子です。

續いて娘のお優にいろいろ話しかけて見ましたが、若さと、恥かしさと、恐ろしさに顫ふるへて、何を訊いてもハキハキとした答へ

は得られません。唯傳七郎の事を訊いた時だけは、

「あの方も可哀想です。——お父さんはやかましかつたんですもの」

十分同情のある調子でした。

四

「親分、この方は、何處どこの人だえ」

甥の傳七郎の聲は尖とがりました。二十四五の髯ひげの跡の青い、背の

高い、逞たくましい感じの男で、無暗に笑顔などを人に見せない、——

その癖、血の氣の多い若者です。

「錢形の親分だよ」

「あ、さうか、近頃評判の」

傳七郎は軽くあしらひますが、江戸の御用聞で、川崎まで乗出して、我物顔に振舞ふとも思つたのか、その反感は顔色にも、聲の調子にも溢あふれます。

「傳七郎さんとか言ひなすつたね、少し訊き度いが」

平次はそれに構はず仕事を進めました。

「お前さんには氣の毒だが、證據はあの通り妙に揃つて居る。第一番に御主人を殺した脇差は何時頃からなくなつたんだ」

「知りませんよ。一年ばかり前芳町の刀屋で冷かし損そこねて一兩二分で買つた道具だが、用事がないから、押入へ投り込んだきり、

三月も半歳も見たことのない品だ」

あはせ

「拾の方は」

「洗濯を頼んで出して置いたが——」

傳七郎もさう疊みかけられると、さすがに困惑します。

をと、ひ

「一昨日の晩、何處へ抜け出したか、それも訊かなきやならない」

「何べんも同じことを言ひましたよ。町の鶴吉師匠に訊いて下さい」

傳七郎は如何にも忌々しいと言つた調子です。

「孫三郎親分、又六とか言ふ番頭は見えないやうだが」

「又六どんは店に居ますよ。相變らず帳面の方で——」

お千世は取なし顔に店の方を指しました。其處へ、

「これは親分さん方、御苦勞様で」

三十八九、やがて四十年ねんばい輩こづくの小作りの愛想の良い男が入つて來ました。

「お前は又六だね、——劍術をやつたことがあるかい」と平次。

「飛んでもない。親分」

又六は飛上がるほど驚いた様子です。色白で奢きやしや車で、筆跡の美しい、内氣な又六に、劍術の取合せはあまりに唐突です。

「何時頃から此の店に居るんだ」

「三年になります。その前は日本橋の佐野屋さんの帳場に居りましたが、佐野屋さんが分散した時、此の家の旦那様に拾はれて參

りました、へエ」

「一昨日のことを詳しくくは聞き度いが——」

「私はどういふものかあの日は朝から熱があつて、赤い顔をして居ると言はれましたが、到頭我慢が出来なくなつて申刻なうつ（四時）前に歸らして頂きました。晩飯も抜きまして、葛根湯かつこんたうを二杯も呑んで、一寝入りとすると、曉あけがた方御店から小僧が飛んで來ました。旦那様が——」

「お前の家は何處なんだ」

「この裏で御座います。なアに五丁とも離れては居ませんが」

「お神さんや子供衆はあるだらうな」

「女房に早く死なれて、叔母と二人で住んで居ります」

この男は訊けばいくらでも話してくれさうです。

それから一刻あまり、灯が入つて、夕飯の済むまで、平次は此の上もなく念入りに家の中を調べました。いざ引揚げようといふ時、

「孫三郎親分、傳七郎を擧げてくれまいか」

平次は孫三郎を物蔭に呼んで囁くのです。

「え？ 傳七郎を——あの男が下手人？」

「さうだ。あれだけ證據が揃つちや、放つても置けまい」

「だって、證據があり過ぎるぜ。傳七郎は一國者だが、惡黨や、

馬鹿ぢやない」

「——俺が縛ると事免めんだう倒だ。兎も角頼むぜ」

「そいつはいけないよ、錢形の親分。もう少し本當らしい證據がなきや、俺が笑ひ物になる」

「あれだけ證據が揃つてゐれば申分はないと思ふが——」

「だが、——その證據は皆んな拵こしらへ物だ」

孫三郎は頑ぐわんとして聴き入れません。日頃の交際で、傳七郎の正直さを悉ことごとく信じ切つて居る爲でせう。

「後悔するやうなことがあるかも知れないが——仕方があるまいな」

平次は諦らめ兼ねる様子ですが、それでも自分で縛るほどの氣にはなれなかつたものかそのまま孫三郎の家へ引揚げました。

五

「親分、金藏の窓の^{たこ}風を取つて來ましたよ。^{くわん}鑢に絲を通してあつたんで、飛んだ大骨折き。風は滅茶々にこはれて居るが、^{うな}唸りは立派だ」

ガラツ八は暗くなつてから風を持つて孫三郎の家へやつて來ました。

「成程こいつは良い風だ。第一唸りが良いね、^{がんぴ}雁皮で念入りの細工だ」

「ところで親分、今晚なんか仕事がありますか」

「大ありだ。孫三郎親分の子分衆と一緒に、傳七郎の身許を念入

りに調べてくれ。師匠の鶴吉とどんな事になつて居るか、金遣かねづかひはどうか、お優いうとの間はどんな事になつて居るか。――待つてくれ、それから書き役の又六の方も調べるんだ。あの男の家に若い女が居ないか、化粧道具があるかないか、それを見るが宜い。
 白粉おしろいでも紅でもあつたら借りて來い。一緒に居る叔母さんはどんな人間か、暮し向はどうか、日本橋の佐野屋に居る時の勤め振りもわかると宜いが、これは急のことではむづかしからう。――どつこい、まだあるよ」

「まだあるんですか、親分」

「後添のお千世、あのお内儀を調べるんだ。こいつは孫三郎親分の方が知つてゐるかも知れないが、身許から身持、此の頃の様子

と言つたところだ」

この夥おびただしい用事を背負ひ込んだガラツ八は孫三郎の子分二三人と一緒に飛出したことは言ふ迄ありません。

その晩、夜中近くなつて歸つて來たガラツ八の報告といふのは、——傳七郎は正直者で金離れがよく、一徹てつで短氣ではあるが、町中の評判の良いことから、師匠の鶴吉とは腐くされ縁で、本人は手を切りたがつてゐるが、鶴吉の方でなか／＼離さないこと、お優との間は平凡な従兄いとこ妹同士で、それ以上に深い關係などがあらうとは思はれないこと、——それから、

「又六の所へは時々若い女も來るらしいが、叔母さんといふのはかなつんぽ金な、ないしよごと聲だから、又六の内證事なんか判りやしません。暮し向

は良い方で金もうんと持つてゐるさうです。家の中には紅も白粉もありましたよ。——この通り」

ガラツ八は懷ろから平次に言はれた通り、又六の家から持つて來た白粉の紙包みと紅皿を出して見せるのでした。中を開けて見ると、白粉は殆んど手もつけて居りませんが、口紅はいくらか使つた様子で、白い紅皿の肌がほんの一部分剥^はげて居ります。

「お内儀は？」

「あれは大變な女で。あんなチャラチャラして居るくせに、恐ろしく勘定高くて握り^{こぶし}つ拳で口やかましくて奉公人泣かせですよ。品川の茶屋の娘ださうで、又六とは仲が良かったやうですが、近頃は妙に睨み合つてゐるさうです。傳七郎とは反^{そり}が合ひません」

そんな事がガラツ八の搜り出した筋でした。

それから半夜。翌る朝はまた事件が思はぬ新しい局面を見せて居りました。

「錢形の、大變だ。今度はお嬢さんがやられた。命は無事かも知れないが」

「えッ」

孫三郎の聲に驚いて飛起きた平次は、朝の支度もそこく、に八五郎や孫三郎と一緒に飛出して居りました。

小牧の屋敷では重なる騒ぎに煮えこぼれるやう。美しい娘のお優いが、昨夜眞夜中過ぎ、何者とも知れぬ曲者に襲はれて、短刀で二度まで刺され、床から抜け出して氣を喪つたところを、隣の部

屋に寝てゐる繼母のお千世に見付けられ、危ない命を助かつたといふのです。得物は箆^{たんす}筒に入れてあつた死んだ主人の短刀。それは血に染んだまゝ、投げ捨ててありました。曲者は何處から入つたか、まるで見當もつきません。

「孫三郎親分、昨夜傳七郎を縛つて置けば、こんな事はなかつたんだが」

平次は傷ついた美しい娘を痛々しく見やつていかにも口惜^{くや}しさうです。

「今からでも宜からう、錢形の」

孫三郎は昨夜の失策に懲^こりて、一舉に傳七郎を擧げようと逸^{はや}るのでした。

「待つてくれ、親分」

「いや、放つて置けない奴だ。伯父を殺した上に、從妹^{いとこ}まで――」

「その前に少し訊いて置き度いことがある。家中の者を皆んな此處へ揃へてくれ」

平次は孫三郎を撫^{なだ}めて、家中の者を全部奥の一間に集めました。隣の部屋では傷ついたお優が、外科の手當でうつら／＼と眠つて居る様子。

「皆んな揃つたら訊き度いことがある。隠さずに言つてくれ」

平次は一同の顔を見渡しました。其處には派手なお内儀のお千世を始め、老番頭忠助、書き役又六、甥の傳七郎を始め、小僧、下女まで十幾人、固唾^{かたづ}を呑んで控^{ひか}へたのです。

「この中で一番器用なのは誰だらう、細工事などのうまい」

「又六どんだ」

小僧の一人が言下に應じました。

「有難う。ところで、この^{たこ}風は誰のだえ。誰が拵へたんだ。——
なか／＼^{うな}唸りの工合などよく出来てゐるが——」

「傳七郎さんだ」

小僧の他の一人が答へます。

「實を言ふと、主人を殺したのは此の風なんだ。風は金藏の二階
の窓の^{くわん}鑲に掛つてゐた。——引つけて置いたと言つた方が宜い
だらう。絲は鑲を通してあつたさうだから。夜になつて風向が變
ると、土藏と土藏の^{ひあはひ}庇間を吹き抜ける風が、この風の唸りに當

つてブーンと鳴る。——御主人はそれを聽いて驚いて飛起き、土藏へ入つて見ると、中に隠れて居た曲者が飛出して、いきなり手燭を斬り落した。あツと言ふ間もない、三太刀、四太刀、滅茶々に斬つて到頭止め^{とどめ}を刺し、土藏から飛出した曲者は、血飛沫^{ちしぶき}で汚れた袷を脱いで縁の下に突つ込んだ。——風は用事が済むとすぐ引きおろすつもりだったが、絲が切れてうまくおろせなかつた——これを窓の鏝に残したのは曲者の大手ぬかりだ」

あまりの事に一同は息を吞みました。平次の説明はなほも續きます。

「曲者はあの晩金が入った土藏を開けることを知つて居た者だ。多分一寸の隙を見て土藏に潜^{もぐ}り込んだのだらう、そしてゆるく

二階の窓の^{たこ}罫の細工をして、風の變るのを待つて居たんだらう」

平次の言葉が終るか終らぬに、

「野郎ツ、伯父の敵だツ」

其處にあつた血染の短刀を取つて、パツと又六に飛付いたのは、甥^{をひ}の傳七郎でした。

「あ、待つた」

止める隙もありません。逸^{はや}りに逸つた傳七郎の短刀は逃げる又六を追つて、グサツと其の首筋へ。まことに傳七郎は火のやうな激しい氣性の男だつたのです。

×

×

×

傳七郎は其の場で神妙に繩を打たれましたが伯父小牧半兵衛を

殺し、從妹のお優に傷を負はせた敵——又六を討つた經緯が明白になつて間もなく許された事は言ふまでもありません。孫三郎と平次は一應手ぬかりを叱られました、半兵衛殺しの下手人を明白にして、御用聞としての面目の立つたことで満足したのです。

「半兵衛殺しは、傳七郎か又六か、どつちかに違ひないとは思つたが、どうして傳七郎でないと判つたんです。親分は前の晩傳七郎を縛らせようとしたぢやありませんか」

事件が落着してから、ガラツ八はいつものやうに平次に説明をせがむのでした、

「あの時、俺はもう下手人げしゆにんは又六と判つてゐたが、困つたことにまだ證據が揃はない、さうかと言つて、傳七郎をあのまゝにし

て置くと、又六は又なんか悪企わるだくみをするに違ひないと思つたんだ。傳七郎が殺されるか、お内儀がやられるか——まさかお優を殺して傳七郎に疑ひを向ける細工をするとは思はなかつたが——」

「へエ——恐ろしい野郎ですね」

「あの日又六が朝から赤い顔をして居たと聽いて、紅を塗つたんぢやあるまいかと思ひ付いたよ。あの晩金が入つて、宵には金藏を開けると前から判つてゐたから、そんな細工をして、夕方自分の家へ歸つたんだらう。縮尻しくじつて主人が夜中に來なければ、窓から金を持つて逃出して、泥棒のせゐにするつもりだつたのさ。うまく行つたから、主人を殺して置いて、傳七郎が家を脱出した後から入り込んで床へ血など附けて置いた。——お優を斬つたのも

その術^てさ。傳七郎の抜け出した後から忍び込んだに違ひない」

「太^ふえ野郎ですね」

「金に手をつけないのは、傳七郎に疑ひをかける術^てだ。主人が死んで傳七郎が處^し刑^{おき}になれば、あの家の金は又六の自由になる。番頭の忠助などは木偶^でのやうなものだ。望みは小さくないよ。——だが、あんまり細工が過ぎて却^{かへ}つて傳七郎の疑ひが薄くなつたのさ。小器用な惡黨は、大^{たい}概^{がい}しなくても宜いことをして尻尾^つを掴^{つか}まれる」

「悪い野郎があつたものですね」

「店の金だつて、宜い加減取り込んでゐるのだらう。それにお内儀の様子があの通りだから、主人が死ねば、自分が後釜に直れる

と思つたのかも知れない。お千世の浮氣つぽい様子もよくないよ。女のチャラチャラしたのは間違を起すもとさ。——性根が固くたつて辯解になるものか」

「へエ、——馬鹿な奴だね」

「悪人は大抵馬鹿だよ。——それに比べると傳七郎は川崎一番の正直者さ。伯父殺しの下手人が又六と判ると、ツイかつとなつたんだ。あの男も、師匠の鶴吉との腐れ縁くさはあるが、いづれはお優いさんの聲になつて小牧の跡を取るんだらう」

平次の説明を聴くと最早疑ひを挟はさむ節もありません。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第十八巻 彦徳の面」同光社磯部書房

1953（昭和28）年10月20日発行

初出：「文藝讀物」文藝春秋社

1944（昭和19）年2月号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2016年3月4日作成

2017年3月4日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

風の詭計

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>